

ヒサカキの新たな病害「枝葉枯れ症状」の防除技術について

林業試験場 特用林産部 田中 作治

【はじめに】

和歌山県のヒサカキは国内有数の生産量を誇るが、枝葉が枯れ上がる新たな病害「枝葉枯れ症状」の被害が県内各地に拡大している（図1）。薬剤による防除効果試験を行った結果、ベンレート水和剤、トリフミン水和剤の2薬剤に高い効果がみられた。

今回、散布間隔を開け、散布回数を減らす試験を行い、より効率的な薬剤散布方法について検討したので報告する。



図1 ヒサカキ「枝葉枯れ症状」

【材料と方法】

（1）より効率的な防除方法の検討

ヒサカキ「枝葉枯れ症状」に対し、高い防除効果のみられたベンレート水和剤、トリフミン水和剤のより効率的な使用方法を明らかにするため、通常（7日間隔、6回散布）より散布間隔を開け、散布回数を減らす試験を行った。

試験は2024年6月に田辺市龍神村西と広川町津木の2箇所の栽培地で行い、散布条件を①3回散布（10日間隔）、②2回散布（14日間隔）とした。

【結果と考察】

（1）より効率的な防除方法の検討

試験の結果、防除価算定式により得られた防除価の評価基準は（表1、表2）、ベンレート水和剤は「効果が認められる」、トリフミン水和剤は「一定の効果が認められる」となり、図2の2023年に実施した薬剤効果試験（7日間隔、6回散布）より低くなった（図3）。

また両薬剤共に一部罹病枝葉において患部の拡大が認められた。

現時点では、ヒサカキ「枝葉枯れ症状」は植栽木の間伐・断幹（摘心）・整枝といった手入れや施業管理を行うとともに（図4）、発生初期に7日間隔でベンレート水和剤は6回、トリフミン水和剤は5回散布することが必要だと考えられた。

今後、試験結果に基づき、薬剤散布と栽培地の手入れ、施業管理を組み合わせた「ヒサカキ枝葉枯れ症状防除マニュアル」を作成し、防除技術の普及に繋げる。

表1 防除価算定式

$$\text{防除価} = 100 - \left[\frac{\text{散布区供試枝平均罹病拡大長}}{\text{無散布区供試枝平均罹病拡大長}} \times 100 \right]$$

表2 防除価評価基準

80 以上	十分な効果が認められる
60～80	効果が認められる。
40～60	一定の効果が認められる。
40 未満	効果が認められない。

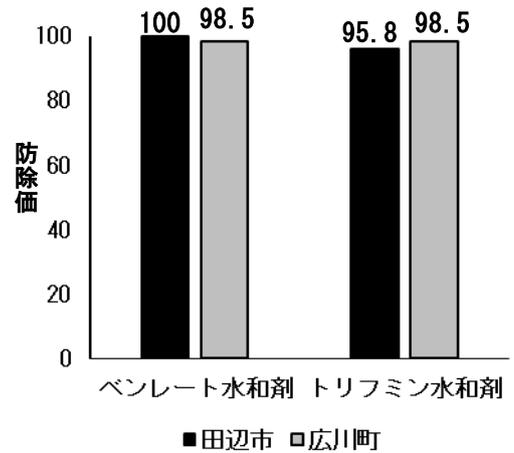


図2 薬剤効果試験（2023年実施）
※両薬剤とも7日間隔・6回散布

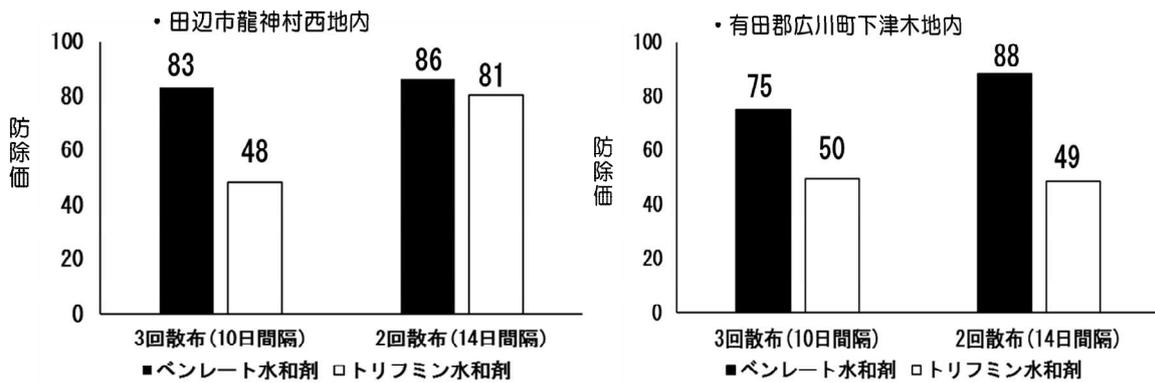


図3 各試験区の防除価



施業前



施業後

図4 ヒサカキ栽培地の手入れ（間伐・断幹・整枝等）、施業管理の実施状況